

『黒將軍と瑠璃の花』

著：秋山みち花

ill：壺也

物思いに耽っていると、入り口の布を跳ね上げて、医師を伴った林杏が戻ってくる。

寝台に近づいてきた医師を見て、美羽は驚きの声を上げそうだった。

黒革の鎧に身を包んでいるが、どう見ても女だ。しかも、きりりとした顔立ちの美しい女だった。

「あなたは……？」

「私が女で驚かれたか？ 我らの部族では、女も力さえあれば戦に出る。それで、ご気分は？」

はきはきした物言いをされ、美羽は後ろめたさに襲われた。

どうして女の身で医師にと、そう思ったのは失礼だったかもしれない。

「申し訳ない。気分は悪くないし、熱も下がっている気がする」

「どれ」

女医師は、気軽に手を出して、美羽の額に触れた。

「大丈夫だな、もう平熱だ」

医師はそう断定し、手を引っ込めた。

それを合図にしたように、もうひとり天幕の中に入ってくる。

その男の姿を目にして、美羽は思わずどきりと心の臓を高鳴らせた。

「治ったのか？」

「はい、もう大事ありません、天星様」

医師に確認した男は、そのまま美羽の寝台へと歩を進めてくる。

堂々とした長身に黒革の鎧をつけ、腰に長剣を佩いていた。下に着込んだ上衣は膝あたりまでの長さで、下(か)裳(しょう)ではなく股の割れた褌をつけている。腰帯に金の飾牌が見える他、装飾品の類はほとんどつけていない。動きやすさを重視した格好は、まさしく《恭》の部族のものだ。

肩にかかる長さの黒髪は結わえてさえいないが、顔立ちは精悍に整っていた。きりりとした眉に、高くとおった鼻筋、輪郭も荒削りだが、見応えのある美丈夫と言っている。

驚いたのは、男の双眸だった。

珍しい琥珀色の瞳をしていたのだ。

もっとも美羽自身のほうが瑠璃色の瞳と金色の髪という組み合わせで、西域の血が濃いのは明らかだったが。

そして美羽は直感した。この男こそ、美羽を洞穴から連れ出した者だ。

「おまえは何者だ？」

「黒豹を見かけませんでしたか？」

ほとんど同時に口を開いてしまい、美羽は我知らず頬を染めた。

男は不快げに眉をひそめ、琥珀色の目でじっと見据えてくる。

美羽は男の迫力に、思わず震えてしまいそうになった。

「何日も死線を彷徨(さまよ)ったというのに、第一声がそれか……。まったく……。おまえは、洞穴から連れ出すときも、黒豹、黒豹と駄々をこねていたな」

男は呆れたように腕を組んで決めつける。

「それは……。すまなかった」

美羽は素直に謝った。

この男は、恭軍でもおそらく高い地位に就いているのだろう。

へたなことを言って、機嫌を損じるのはよくない。

「黒豹など見かけなかったぞ。このあたりに豹がいるという話も聞いたことがない」

「そう、ですか……」

美羽はがっかりしたあまり、か細い声で答えた。

男がさらに一步近づいてくる。

圧倒的な存在感を示す男に、美羽はいっそう怯んでしまう。

琥珀色の双眸から目を離すこともできず、息を止めて男が接近してくるのを待った。

なぜか心の臓が激しく音を立て、頬にも自然と血が上る。男の存在そのものに、すべてを捕らえられてしまうかのような心地だった。

「それで、俺のほうの質問に答えてもらおうか。おまえは何者だ？ そこの子供に訊ねても、はっきりしたことは言わなかった」

男の指摘に、美羽ははっと林杏を見やった。

すると忠実な侍従は、盛んに首を横に振っている。おそらく本当の身分は明かすなという合図だろう。

美羽は男の覇気に臆しそうになるのを堪え、必死に気持ちを落ち着けた。

林杏があれほど頑張っているのだ。主の自分だって、威厳をなくすわけにはいかない。

「私たちをどうするつもりですか？」

「ほお、俺の問いには答えず、問いを重ねるか……」

男はおかしげに口元をゆるめた。

なんとなくむっとしてしまい、美羽も眉をひそめる。

「正直にお答えして、何かよいことがありますか？」

「ふん、ずいぶんひねくれた答えだな。言うておくが、おまえが何者だろうと、俺たちの戦利品であることには違いがない」

「戦利品……」

はっきりと立場を思い知らされて、美羽は呆然となった。

「俺たちは、女子供には手を出さない。そういう決まりがある。しかし、どうやらおまえは、それに当たらないようだ。別にはっきり答えずともよいが、おまえは太子を慰める遊び女か？」

「なっ……！」

美羽はかっとならんと頬を染めた。

少し離れて控えていた林杏もすかさず怒りの声を上げる。

「美羽様になんてこと！」

男はそんなことにはいっさい構わず、さらに許しがたい暴言を吐いた。

「最初は変わった髪の色をした子供かと思った。しかし、その顔立ち……。ここは戦地だ。なのに、おまえのように美しい侍童を侍らせて遊興に耽っていると、笑わせる。

昂国の太子とは、とんだ愚か者」

「兄上はそんなお方ではない！」

美羽は思わず声を放った。

失言だったことを思い知らされたのは、男がにやりとした笑みを浮かべたからだ。

はっとなって口を手で塞いでみたが、もう遅かった。

「太子を兄上と呼ぶとは、おまえも昂国の皇子だったのか」

嘲るように指摘され、美羽は思わず顔を歪めた。

「……私、たちをどうする気だ？」

切れ切れに問うと、男は琥珀色の目を冷酷そうに細める。

「最後の最後になって、いい戦利品が手に入った。おまえたちはもちろん、《恭》の都に連れていく」

「頼む。あの子を……林杏だけは帰してほしい」

「無理だな」

すげなく断られたのと、林杏が悲鳴を上げたのは、ほぼ同時だった。

「美羽様！」

美羽は波立つ胸を懸命に抑えながら、再度口にした。

「あの子は私の供をしてきただけだ。まだほんの子供なのだ。見逃してやってほしい。私はどうなってもよいから」

「無理なものは無理だ」

冷やかな答えに、美羽は泣きそうになった。

「どうして……っ」

「どうして、だと？ おまえたちの昂国軍は散り散りに敗走した。このあたりには、もう誰も残っていない。あの子供をここで放り出せば、飢え死にするか、それこそ豹に食われてしまうか……おまえが昂国の皇子だというなら、もっと気をまわしてやれ」

冷やかな言葉が、胸に突き刺さる。

皇子としての威厳を保つなど、土台無理な話だったのだ。いとも簡単に己の身分を明かしてしまい、そのうえろくに状況判断もできない。

美羽は言い返す言葉さえ見つけられず、不遜な男を見上げるだけだった。